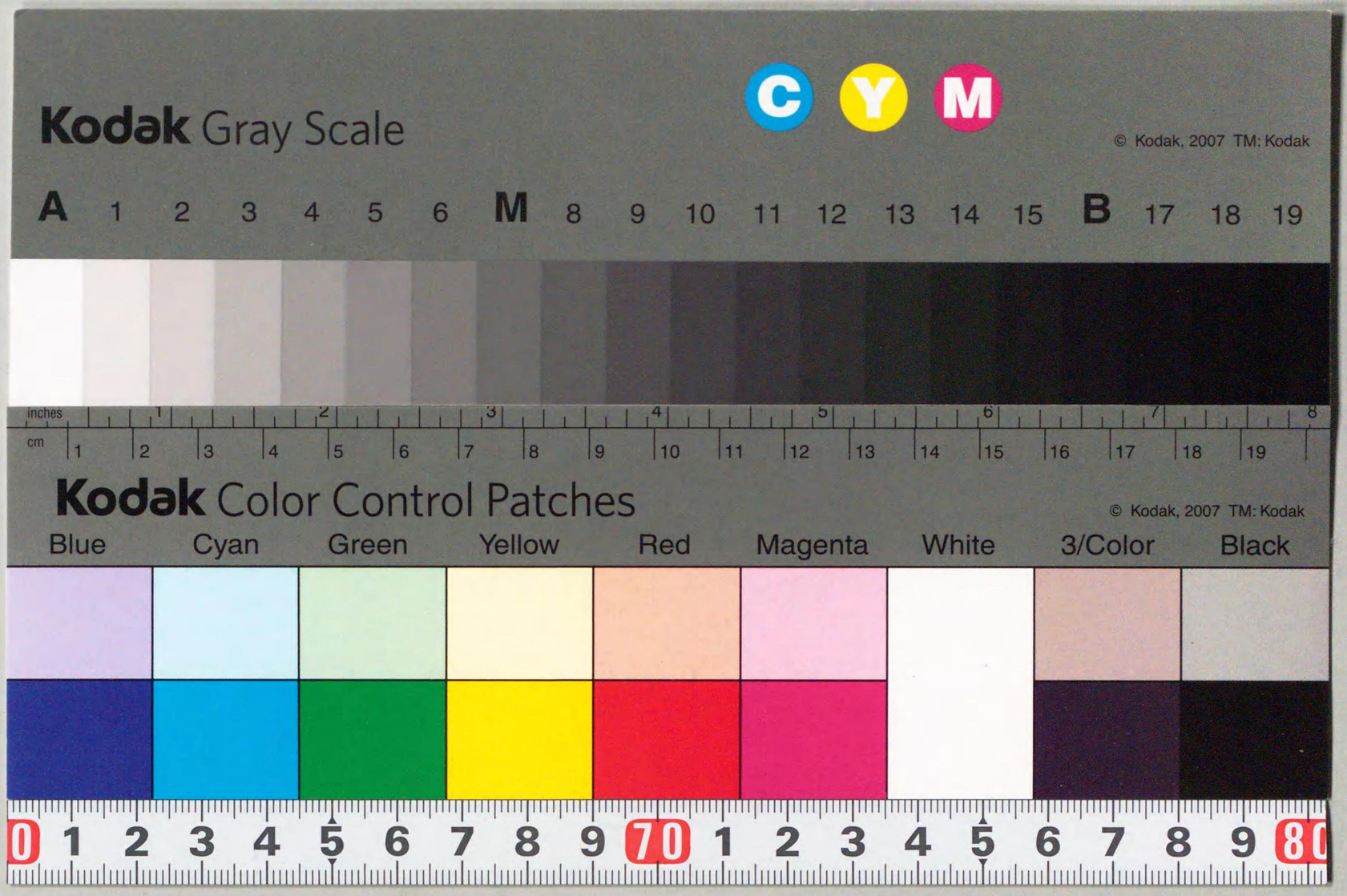


Y994-J8268
12008011827 70
書圖局許特
382
4

教典業俱兵
第之類
四

農業全書卷四目錄

菜之類 一十六種

葱 才一　韭 才二　薤 才三　蕺 才五　悉實 才六　菠薐草 才七　莙蓬 才八　萵苣 才九　蕹菜 才十　葵冬 才十一　紫蕪 才十二　白蘇 才十三　黍穄 才十四　莧 才十五　地膚 才十六　獨活 才廿　蒲公英 才廿一　筒蒿 才廿八　鷄頭花 才廿二　藜 才廿三　葖 才廿三　胡荽 才廿四

Y994
J8268

特許局圖書

國	函	號
735	3	50
號	架	
1	3	
部		
11		
冊		

大正12年9月1日
第382號
特許局圖書庫

國立國會圖書館藏書
I種
W
1200801182770

防風 才廿五

蕃椒 才廿六

葱 一和名きとぎ一字ずゝ俗世ひとゝもゝ名きとゝゐれかり

葱は冬を小蔥と云ぎ名蔥と云ぎ名を小蔥と云ぎ名蔥と云ぎ名蔥と云ぎ名

ー。二三日も苦(ひーろ)などおわひおひ〳〵とそくるおー。日ふ
千(や)ー〳〵てうらとるもようし。○黄疸(わへぢ)のかた早(ひう)にてさまざ
かの物(もの)げんめり。まあり。てお日(ひ)さまの細(こま)かな地(ぢ)をよ
くこやかし。養(やう)生(じやう)とうち乾(ひろ)ー〳〵さー〳〵とそくる日(ひ)前(まへ)べ
さおひ(ほ)れも洞(ほら)にてかし。泥(でろ)ちりあくこみでおもうくし
く睡(ねろ)のそで三尺(ざく)ばかり。お洩(ろう)のかんざしを切(きら)さてのみ
ぬと戻(もと)とたゞ便(たより)をうちさー〳〵ー。ま。そろよう。ふ。を合(あ)せ
ようそ一眠(ねむ)れ。畠(はた)かうべさこれ。ま。ねはうりて稼(かせ)ぎにくく前(まへ)べ
しかんをこうろをいうにもせんくく。哭(なき)ー。生(うま)うとひくい。か
さ。逃(にげ)てまくく睡(ねろ)のそうさ。面(かほ)をかくくかさあざろうま
おもかくー〳〵とさ。早(ひでう)せべ。みを睡(ねろ)の海(うみ)ろ久(ひさ)のへく。
晩(ばん)へ落(おと)そべ。み。れ便(たより)ろかさ。面(かほ)ろべるさ一尺(ざく)ばかり
小柳(こやなぎ)とかさ。蓋(ふた)ーまくもことにくも。又(また)声(こえ)すきの
をそこまうそもおかひくまく日(ひ)とうせべ。又(また)日(ひ)これを
まく河(かは)がんぎを深(ふか)く切(きら)。埋(うめ)まうある池(いけ)養(やう)おどをした
ふさくた稼(かせ)を荷(にな)さおひお厚(あつ)くー。をさそよよ
ろもわ。氏(うぢ)をおひまる。はお早(ひでう)にくくはかれざるお
なりで又(また)日(ひ)と稼(かせ)をもうそくぷよく肥(こや)ー。こらへふさ
る苗地(なへぢ)よ。ふさまく早(ひや)く荷(にな)るはよく招(まね)よもへふる
ゆへ六月(ろくぐわつ)粉(こな)。熟(にえ)ー河(かは)うよ。おく痛(いた)めどもたりこ根(ね)まで

植うるやうにすべし。ゆゑに中ひよも植さうへそろ
も四おかひろくて苦かるべし。又葱こも移へ苗ろうるやう
ひかうれを生ろうるゆへうるやひを八ん合せて苗べし。
又前の穀を作るよりも物こくさく移とお合そくまけバ。
よくなるものなり ○ 同ど
き も油油の肥水こ地ろ。移りく空こて冠うこと地を
冷く新しく糞と多くうち物て干晒し救魚かきこ色
能ーとこくこく七月中旬八月初めうるかひとめく苗
とれうのへしたる葱ハうへて植ぬ小便を多くうぐべし。

猶人糞或粉糞の如きおいひスいちりあくこるとお
も晒中へ入てうこびをもて小便せ和の糞をまいひわりり
○ 晒ろぐ三尺ろすに八ぐ
ふ植くく冷くり苗ろ大小とそりそろへ亜ぼスなを一
ようとうくぺうぶろーぺ六七すろ苗を亜てくぺ三尺ろすの
晒あるべスうぶ植うのべーぺ四非ぺ三葱とそにうハぼ。葱
い三なづくといへどもし大葱ハるさろざるゆへ三なハわし。
又うゆる河がんぎの在ぬ小便をうちうる底を表てう
ゆゑにハうくさろゆるなりぺうへ
なれど独ーひのくうるとかさ
あざり草わもるくす

べし。又方くねぶ七日小便をかくべし　○白これ久くこゑ
ゐをかさやくげく

まにして。ほそみちを一ふみ
とをくとをくうごかず。十月の比
るはうれんぎ一をもちとめ
をもみ〳〵湯にて洗へ白こま
ゐをにて。ふるひたち多く
おくしてよし。又一ふり
をしぼ。基ふとくるを。三月
ん乃白こぼりをゆでて
して。常服なりさらくまこ
ゐ好るよんをなくし白こを

豊後茶巻四

ゐおくく小麦と根よかけくいれとるくぜんくよ
塩へ白こいれもくむ。悪の時ハ。
いてもさらいよ掃除しそくべ〳〵 ○又大悪をもろう
れすぐくそうまくとさ三日程かりおく料理すべ〳〵ふ
役海とそくぎ亜べ洗ふやうにやくおうなるがお
ろおすり。半をかぢり亜て。れよめていうくうへ
て。冬悪となすべ〳〵庵人ハ。かりと用る事を
ろともにて指添小作り。白こもさ城賞就をそくのへ
すれとんくそう。唐書
賞だろくの人くそ

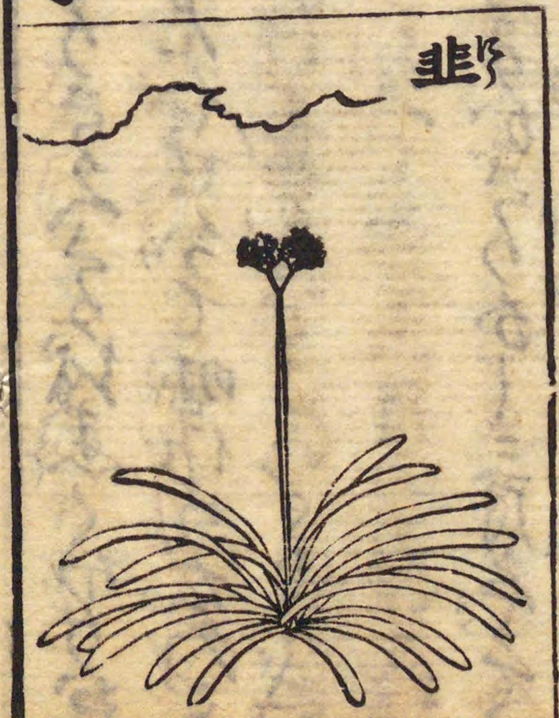
さけざこれに基と葱とのごとくして細
くして短とかるごとくなりて多くかりとるものあり○
そまた葱をうゆるやうなり。これ八三四月よりハ葉ハ枯くつぶ
だらうる根ハ土中にありて実をかりとる。実中にて
ふれ丸を四五年ようくそうる内ふかくふかへくと
とうくとにつる。七八月開花うし。そもびんざさおよ
深くかへ大葱ようハかえしこげくうへ。蓑ありと載ねもそ
ざ中うち芸うり。晴中とされうてをくべし。これ
よけざとなるよりへ。蓑まきへようくいろ
紅わけるもまたもとうもこげとうのるなかり。

又秋うへて十月苗ようくそうるなまくかりお
こし。一ふを二ツ三ツにわけてもん合せうて晴作うた乃ご
とくしてうへ。肥を多くかけ。蓑ありてさいくそぎ。
よ冬をようくして春ハ分ゑべし。正三三月のころ花
分とりてもよくさうるかごりかし。三月をて
抜て植よ。一ツのねより数本ありてよくかへる時ハねをるべし
○葱よけざこもうのるなおうべし。そいまよくてうの
同じ。庶蓑を多くかりとるべし。三月抜る。これ根を中てありてくまる
ごうの葱よそくふまへ細

くゐとしるをきるをよしとす
おそくて三月ばかりてうゆべし
ねかしておく年中かりそなへ
葱ようなれ細し

韭 ネ二

にらハ古来名そるきこゑ
てさかんなり陽起草とも
くさを補ひ温むる性ありよ
きさかなりスハ一ばうへ
けバ幾ねんもたゑず



ねかしてさうゆるなれバ
て特人家ことにありぬ
を名をおくさ苗とそ
さくとげておかれバよく
けくうへるなりすこ
ゆゐハにかぎつてうゆべし
あまくさく九十月又わか
その上にたをかけ置べし
けくさく十月かくのごとく
よそ庵人ハ県業なり

ねかしておくうゆるなれバ
て特人家ことにありぬ
を名をおくさ苗とそ
さくとげておかれバよく
けくうへるなりすこ
ゆゐハにかぎつてうゆべし
あまくさく九十月又わか
その上にたをかけ置べし
けくさく十月かくのごとく
よそ庵人ハ県業なり

えてうりさわぐ物をそこなふ事おびただしくして作りくるしむをもつて也○睡の逆風を作るといふ事人のうはさ戸候と同じ○にかゝるごとく史記にも其一郡もとるたぐひまでもそうさ也○栄ちりわくるごとくおもむくさまをけびやうくさうくと平家物語又河く蜘一疎或鶏の毒をかけ又は逆のかぶとをねてしまふ也○栄のうげるごとくもくもげるおそろしき事なりとぞ法ぺに其噂ことにくるぐさうの風ごとし

もあらぬやうに栄英久にして稍うなり○これ逆英といふことなり○根よにあづる性のおかしくうのべ○根よにあづる性のおかしくうのまゝばりかしてうゆる時古根のさうげごとくおわるをかさてのくべ○そまうのまゝごとくうのまゝにこばそよやをるおなり○又ひとくくく

薤 らっきょう

葱と大葱ともに味辛くさのこと臭うべし。功能あるものにて人を補ひ温め又よく小便を通じ人つよく肥ゆ。二三月苗を植ゆ。一升よし。

○うゆる地の軟らかなるを撰び一寸ばかりを切りて植ゆべし。さて日々に水を灌ぎ時々に糞を加へ培ふべし。葱白の長きを欲せば土を厚く培ふべし。葉を青くせんと欲せば土を薄く培ふべし。

○葱の種を採らんと欲せば霜降りて後根ともに掘り取りて土中に埋み置き春に至りて植ゆべし。

○葱の虫を去るには灰を葉の上に撒けば虫死して落つ。

○葱の根を煮て食へば能く小便を通ず。

○葱の白を去りて青のみを食へば能く汗を発す。

○葱の青を去りて白のみを食へば能く大便を通ず。

○葱の根を去りて葉のみを食へば能く目を明らかにす。

○葱の葉を去りて根のみを食へば能く精を益す。

○葱の青白ともに食へば能く中を調へ気を順ず。

○葱の花を多く食へば人をして忘れ易からしむ。

○葱の実を食へば能く人をして聡明ならしむ。

○葱の汁を以て漆瘡を洗へば即ち愈ゆ。

○葱の汁を以て蜜に和して服すれば能く久病を治す。

○葱の汁を以て蜜に和して耳に灌げば能く聾を治す。

○葱の汁を以て蜜に和して鼻に灌げば能く衂を治す。

○葱の汁を以て蜜に和して目に点ずれば能く目を明らかにす。

○葱の汁を以て蜜に和して陰に塗れば能く陰瘡を治す。

○葱の汁を以て蜜に和して瘡に塗れば能く瘡を治す。

○葱の汁を以て蜜に和して蛇に塗れば能く蛇を治す。

○葱の汁を以て蜜に和して蜂に塗れば能く蜂を治す。

○葱の汁を以て蜜に和して蠍に塗れば能く蠍を治す。

○葱の汁を以て蜜に和して蜈蚣に塗れば能く蜈蚣を治す。

○葱の汁を以て蜜に和して蜘蛛に塗れば能く蜘蛛を治す。

○葱の汁を以て蜜に和して蝮蛇に塗れば能く蝮蛇を治す。

○葱の汁を以て蜜に和して蝎に塗れば能く蝎

つうなる花にてうつくしく秋うるる花にてうれひを味
甚く相宜もたしつよくこつきたるぞうへ
うへ辛くして痛よ
狗しるてみし○花ひこらく三四
と三三すづとりくし小菊よがんぎと切
久しくかまてるをよくねかひ活ひそよくうへ
でみとうれまおてねるよわれぬさ本とか
ちう。絞てにへ口さあざうなどさいくしてそを
でこれ妻みとうくべし○うゆる町ろのもへ月
中旬九月初めますぞいよう小森へわつよくうゆべし

○ひくへ苦象よかくべうむ。茎と刈町ろう
投へ潮くもうまつくべ苦人もまて中らうのわれ。
生苦ものて物ごとて毎朝かづく食すべし。
又うゆる法用作うしかんぎを浸くこうまのうと煮
よ煮てそのうよよう豚とこく並べへ妻
みとかけたる汁おかのべし○又実をそうをきくうの
まこびを年小蒜となるおうへ。来年根うたると。
わつくく一粒づうて漬実をわたぷこと麦
わでくにもなるものあう。蕈菜の新しの人妻とをく

那四れそ。のかひおし ◎又兒を炙人の風雅のんかい
やー北葉にてくゐもうのまーとゞくとうのくにて
和くうにて牙脫さいはまるぐ
はよ黄散あり。それ鶏毛なくて小
わざるおなり。庶人ハうバと餅にてそ。けんふくとのくに黄
て食しうんくうり食毒と得し。腔ゐまきく灸
神し。瞰血ふいもりてそれうにてぬりそ血やまよバよ
くまべーえ痔か教灸と
巻こそ。ぐくねちれさうやくをとあるも蒜のるもそ
黒んを解するおるなの細なく功能お

かきおなり。人氣うあうずる作るへ

薑 すゐ五 韮

ふうぐハすぐれうよるふの
おあり。陽佐にも不撓して
合もとゝはり。史記にも廣
くうへくそ。利のうこ分を
るうを載ろ ○うゆる
地い油ゐて肥地よ宜し。深耕
なく穿ゑー。淹ゐもかく雅接ハえ通もかき絶し
とそこ三月うゆる時えかをこそ。さて移ろうあく

芽のわかき出んとするとき、分て一ぶくしのんぎ弐尺一尺のうねをこしらへ深く切あうひの苗を六寸にそうえ付ること前のごとくかき廻し培ひそへべし。さて芽立おかるとき雨天の中うち培ひ肥くしてよし。旱天をうくるをわすれず利水他の作物のごとくむやみに痛ること勿れつよき苗

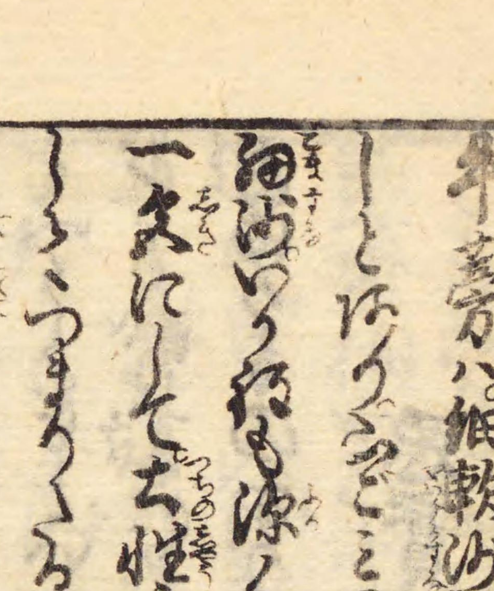
ハ六月八日稲をかるべし。苗をとりさるあみくおなじ。苗をとるとき根を深くしてとるべし。浅とれば又深く植ることなりがたし。又深く植ればおなじ初うゆる時をやうが扁なくして吸味しからず。深ハよけれやすく腐ちなるふうと知べし。○さて六月芽立ハ深くさうえ苗そろうて後乃一ぢと掘薹毋ともぎ去。但その苗とりさるとき雨の中ハ深漬稲ハ苗を差しやすく又乾姜にてそこなふ。七八月根活あうくねをぬうたるごとくなるとぞ薹

とろあり。此時粉程にすりべし。其ま
葛紫根いろ〳〵なり。根よく肉うるく九月の末
月の若きに入りうる。是の間も暖気なき
ゆへ。冗と取りかたを合せて
きなり。風ざる納ざる根
うくうる国にてくハ十月ま
らくなる物あり。又取りそ
さゝ下にも白うをもつまくうくんとそ本生
姜を入下ぬる火をそ
とゝろる口をうくふさぎ

何たとうくまべし。又生姜の時費ありうると平姜
にもとべし。浄く洗ひざりと湯煮してかさ庶ようべし。
乾しとく粉あどにもとゝろべし。
生姜あそうるふ。僕をゝねおなりうる自分
に用ゆる所をまるにねをゝ。功能あるおまく用ゆ
くべうゝとも杜姜を合とれど天年を損
おと醫書にくうりされども居おづくく杜くく
用ゆるものあり。拙杜ハ用捨してまくハ合すべし

悪實 才六

悪實



牛蒡は細軟なれば沈て宜
しとなりこゝの悪くくる
細ければうねも深く起ますで
一丈にして太性うくまく
うつまろくるとうつと
も八幡なごのたてろもしの
深さ二尺八寸畝とかくるの
うら迄一起ますぐ況おも
るよ本の根茎又もろ根茎とか
わるひろく風味あるものなり
悪實

うね作うへ横筋よてもよろ
らかく前くこゑとうらぬと
もたねと一粒小一本の根うに
但きうひ一寸さ角ゆうべ
おひと成そへをよまく
ゆくたさねとくべ一ぱさ
ゆく一くろうくひうかく
るとバまくおこもべ一ぱ芝
中をかさおごろぬよおもく
まて痛むものなり ○さそ

ものうへにそれを置にてもはなはだしくうるかく用のべ
ーを拔ねまでも毒氣を用のわるく味もよくおちこく
ふるべーおそき時は毒氣甚敷病ものべーに染よくものも
わるくうるかくべーまた云牛壽はうるかひとつんとく苦べ
ーまたはもしくはそうがくうのべーさてかく
ても十二月までもおくべーまたは塩うにつけおくべーまた
かまでゆでてさつまいもをまくうに名
用あるべーまた大よく拔べーまた田
にもくれのものとこにおくべーまたはのくとそく
振るべー○同じく牛蒡を作る上田
大小ともに種をあり分ち一尺ばかり程よたがやし深き
耕に穴を深くかりひらきて堆肥を土ふりて穴の中うら
堆肥ふかくべし柴はおにて入ゆるやかにて入ちをおかひをくべ
穴よりあへ揃ざるやうにかりひらきて其上に用ゆるやさべ
揃どうして堆肥を乾用にまうえ付ざうるやうにきうへべし。
付うるとうとうも肥ざうるたをおのひ並べ穴の中うう
てもやーかひとありとく肥ざうるとく牙脫く味もうー○
又移よにするとべうへ付ふしとくまうよくまうよくまく蔓
ともかくかけ出付べ名まべーまた肥のくやうに作
るもぜのくやうに七月かれくまうろうくめて。

りそうなものごさ雑まて袋へ入ときて二月よく苅べし。それをつねよ宝うへる前肥かわれども。冬うち地ごしらへ二月よくうへ交よ招よへゆく。菜の苅さんともあるごろにおそくうへ三月苅よくうへうねるもあれど。二三月苅よくうへうんぬるもよろし。一月のうち生ぜぬさきかぶ生もをるくつと。寒こまれ和らかなる所へうへ。肥て牛蒡ハ冬苅べし。かぶくハ入ぬるハなきのなり。○又牛蒡て大根麻などハのや地と焼ハど。予て畑地とうへうねよ五寸間一尺あてうへべし。○同じく牛蒡ハ冬苅よくうへ。又牛蒡の

採おきてとるの深さみそ汁ぢるに多くして。
一畝乃畠と植おもなき程ハ
もうらうく手間しとさ。
畝しるに、かきこかし。實を中さゝ。
三月よりそ
まきおうごくと卒らうかんごを一
尺位うて實くめた種乃中
ゆくたいそようくそろ
るとあり。夏實とみくる多
ぢうかひをむごれをせ
けく苅べし。かめ。
とゝきそうるうし。その外も入多
くして。

菠薐草

をたびく多く用ゆ。實を把くねうつくるゆめ
ゐ笠紫さうんとするをわくふとかりくがめ。油うと
るいろ和ふーそよもぞくべし。根乃
ねの平にまおもぞくべし。

菠薐草 オセ

そうまん苗の苅くし。月
頃をさゝで生ぬねと
いひふうせう。植るゆへ。
九の二月中旬苅ぞ来月初

ふくまるるあり。今心ある人月朔日に
到て苗を求てもとゝ移植るなり
もと会也。畑作まゝ。がんぎをお深くして苗ゝ八
月早く苗ゝく乾る麦をおかひそろへそろへ
一。九十月さいくみをそうぐ
こゑをそろへくかゝ一処。
七月二苗ゝる彼ふう
あに浸一。わげ五よいかゝ
まよに糞みをそうぐ前もくか
をそろへくそろへて糞みて
あり。みそ糸染をかゝこれ。まを
てこいき時切そう逃湯一清やげそろあげさゝ一

乾一。菜実乃落く枯ゝる時用のへ一ス
一をゝて正二月まきそろ
をそろそうかひをめて移一

若蓮 才八 上方にて多くうゑる

若蓮又乃名八。雄菜共
云畦作う移ると苗ゟ大
根と同ず二月苗ゝく四月
苗乃ふとるよまう也そう
作一うゆるもう一。菜乃

若蓮

絶つるゆへ料理うるに
よろしくまたなり又八月前後十月前ふるる紙暗作りて
乾すに一ツ〳〵紙重ねをおよふけば悪をけるゆへ
四重五重をおるゆへよく乾かすべし又なんぢ
まに入置を厚くやさおくべし
ゆるつかしと記す

萵苣 才九

ちさ粉〳〵あり紫の丸さ
あり色きのう長くとゞ
まるくろあり緑冬をるなり

ゆうすゐきあり中にて紫丸くひろく
たうをそく立〳〵くさうのごとし和らかみして味甚よ
六月すぐく紫乃さうんあるをあり色を求めてくゆ
し色い六月より稀を去をく八月まく若べし
紀地をこうに苗さうへる時晴作りし
ふがんぎを初六七寸に一なづくるのべし葉ものを摺の
ごとくうち洗みの油をてめうがおやりうみそのうを
とうてもおろるまおし苗ふとり深秋十月春月正
二月よりけうのべしさねともに細粉よくまわ

つまくるかな云にありてうくさうへそる如あり。まよ
かりてうえてうるハ柴をげうしうへをそうのも
あり ○ 毛も空をそうにてこれを
川もやうふーて。綾中をかめうふー。ろく料紙
よ更ゆる如なり。又空月たうこれを
うみに漬若ことをめうー。硝子の盃よ浸ー。腸のたまにー。ぎ
襲漬などーて猶更如なり。ぎうぎうの花實
むとする時まとおうけうそうへーぞまくぎうれ多色。
改花と吸あふ實うかー。梅の時分。卵にそ花房
面とえて長く枝るが更也。仍仏
ーそも枯ぬ程よ如無ぎ

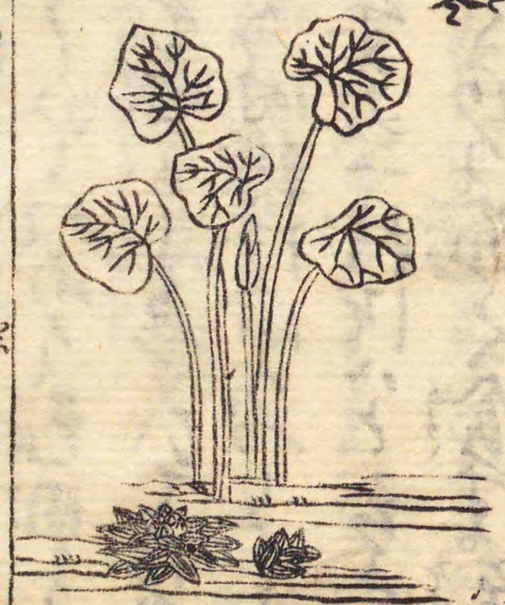
蜀椒

襄荷 ㊦十

きやうがへ樹の下を赤日の
ばえ地をぬむ如なり。二月よ
根をわけうめべー。一株よ
てそほるへうず一年
ともよ
久ーくこまずうくさうの
ばえ。襄たをれかひもそ秋
付言葉を指ーぬのあくたる
ようこうのもで又そに衣秋
こうえを生ー。秋まそ
もおつぐうくさ生そ毛

を灸こゝろみるとよし又七八月花さかんを折とりて
ふすまこまかにして料理ふかよくまぜおなじ名をつけ
べし○松茸の採方にあらず○めうがは
も樹木の下かどより採
るくいつれも苗ありうへ
柵をかこふ○薯蕷葡萄
とひとくよしかれかれの
かさうへ苗植の利あり

款冬 才十一



款冬

款冬は畢へ罩をおろうくおけ
ばよくふるゝ苗を赤
み移ずつくゝ樹のうみの肥
地をおこし地よく深く肥和
らかにうへざいく淳を
そゝぐ或酒の糟乃汁をかけ
るくなる和ありびんこ忘
ず九月に折とりしをおな
をかなへ暗作りしを冬まで
まにうへ淳糟の汁をかけ

ふうく 長くなりて 節一町を
過ざるさわあり 深き内せばく 色黒く
ようすにあらず 其ほそく 色白くわかく
節おおく 皮厚く わかくとも
其ゆへ料理ふよろしからず 今一種あり
くき葉うすく 丸く 莖もかぼそく
そちもすくなく 秋うりのごとくして味よし
べつに作りて 芸演ぶきうの時料理ふるべし。
花は葉ごとに みそあへ 漬物
ふきて 佐くに 秋黄なる 花さくなり 莖葉
共に食す。至

味能をおぎなう。 諸毒を解とも 魚毒をころも
河豚の毒よ中つまるものついをうくもこれ
を服すべし。甚験なり 秋
なり 魂魄をやしなひ 食気を和ぐ 本草につまびらかなり 能その
ふさこころをたのしくするのふさ

紫蘇 才十二

ふうはハ九月ころ 苗を取
植て 二三月 地に 苗床
を作りて 庶物に合せ
うえ 苗そだつ 其
ちとがおおひをくべて お

つくかつるまきくさとをたて三月晦仕廻し。

○紀州にてはくさ屋敷ありて菜屋ばかりつくるのべし。廣く作りてかの菜屋より賣も利分あり。尤菜畑ばかりにて作る時は肥多くいらず。其上菜畑は年々に地よくなるゆゑ肥なくてもよくさるゆゑおなじ所へ作るべし。ずいぶんよき肥をつかひ菜ちぢみなく露霜おかぬやうに仕廻ふべし。又菜ニ色なりとも其こやしをうるのべしちがひまきそして菜ハうるまきハ作るべからず。ずいぶんよき肥宜しくなくては菜ちぢみ露霜ふつけ義ひやうの時分菜をつくりて漬菜をつくりて漬ものにするなり。生魚にかまぼこ魚ところすよ

菜にて更ゆるよへ。漬ものにするにハ百ぢく未だ根も出ざる時分菜をつむ。日にすべし。黒ふのへ菜乃至まくなるまでつむべし。或日六月根

よろしおなり。ぶん種ものをうゑおらんとする時刈ゐ下に莚かこ紙などをおゆかうく折くゝ実をうゑべし。そこへ菜も実も乱を蒔じ。乱をとり。おいりてあくあよ加へくくよりしおなり

白蘘荷 才十三 上花にて下ごとくなり

白蘘荷はよろしく油うをするものあり。ありそなどを畑へさゝ蒔ふかくも培は油あり。ぶんを用多し。

焼油うりて売よりおなり。ぶんも白ごま乃二種あり。二ゐと共に宜し。把ゐる細溝泥ゐかよし。すぐくの土にくも深く新しこゑ。畝四尺すれ時畦作り。

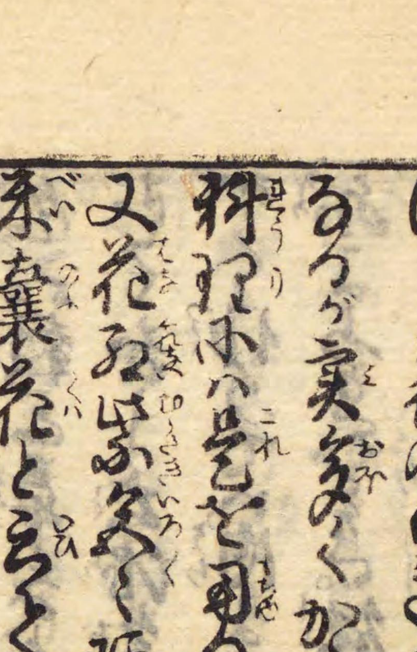
菘の肥瘠をん合せ。ぶんざ紙切一ぱづく植ゐる七八ず戎肥ゐる地は一尺余も深くう糞ハ仍そのまゐにまり色くく多くも用ゆべし。厚く培ひ苦うかどだりこに去をそもおもゐ庸こもせぶそくさうゆるものなり。そゐる所牛ゐるれさりおゐこわらを。畠の境道でこゐなど。牛ゐるれ喰ふ数のふせさとなるゆへ。さ所にうのべし。本かげおうげ屋寄ようれ。他の作りおも

のかつくようにぬかよりも大豆よはお来ぼて早ちぢ
葛ふも痛まぢぞ。秋大風吹ぬいまぢ花咲ずして
つぶこ粟のつぶよあるゆえ風損もすくなくこやしぃ小ちへ
おくり付といへどもこやしのきけぐこやそこかつぢ大抵の
地にてそうく作り合せぬねで雑穀おの刈ちのなよ和
にわらぢ作りて造作おくして植ちよくほしきよ和
なり。去ば能く討ある所よくて多く作るべし。刈収ろり。
時分乃足合せ刈あるぢ。刈時これを知ず遅ければ
落ち。栗まく責にろうそくなるやこぼれん
ともろ時分よ刈ろ。藁を束つこ置。

よようも葛かど蕎おかひむしてぼ二日しても栗
くさりろ時よりひげ栄を落し。ぶにもろとも
き。照日よ一日二日干てうちあべし。をぼよ手おり。
二三面ふしてまくおちあこべし。唐人ぃ山猫よて猪
をむげよ和のかうだ。
色ふ穀三草などの作りぬよ和
もくおし。去ば多くさ雑
かくぢりて。間よ五四
あよろこ。能よろ藁を束つこ置

蕎麦 米十四

けしの花の白きあるが実多くかうずて。
料理ほかの品を用るおあり。
又花ばかり多くうゑ。それを
糸嚢花とらく詩にも
作きり。花ばかりにて葉のなきあり。
これどもに紫乃色あるを
よくて料理かようす。○
苗は秋のまいり
苗も地をゑらにこかし。中を
くるり〳〵ハ尺ばかり
堀をおたくさ苅べし。



罌粟

苗ころ〳〵ふ糸を床にまかふくうてを。
ちら〳〵前にても。各〳〵よまうすべし。植るおかひする
ゐ及ばどわら〳〵きゐくさ〳〵とそねのかきまま
ざるばよそもをくべし。はてねそろ〳〵中を
かさあざりふそろにそこぐのく。
ひさて来ゐ用ゆべし。又云。
ゐこ我ぺら〳〵なりて秋し
蕪ゐどを多く用ひく。
実ら〳〵ざるもひり。冬中
培ひそゐの中にたとれぬ

和ゆく作りて利あるものなり 但花のころ葉ある虫のくひやすければ
できるだけはやうに葉を切さうらふべし
よく葉をもくひつくし 一ぴきをも殘さずおかしゆんなく葉を
きりさうらふべし

莧 才十五

莧 稽古 救荒 二月ごろ
種子をまく 二月乃至
べしこれを久しくたもつべし 赤
きぴきでよくくさるあり
科なふかきをを用ゆべし

莧

味もよし 乾葉末乃粉
ともにあり 七月ごろ
四五月ごろまでに
ころとり用ゆべし
和らかなり 赤き莧ハ
但し時ハ食味よハ
食をわざ悪病を
べし 同食をなすべし ○ 弓歯莧
よあらそ 歯莧 弓歯乃ごとく
弓歯莧とまぎらハしわすべ
ひねとをいふ

らうふしてねんごろにこれをすりちらく。
痰の咽喉にふさがりつまるをくだくあるひは
こめつぶほどにまるめてのみくだしてよろし
かしこ

地膚　才子

そくさうよく菜と合して食し。
あへものつものにほうりて料理よ
ろしの圃より畦ぶちうゑるゆゑ
にこの名をえたり。地膚子
くうくに肥ゑふとる菜蓆

地膚

れどもとりさばかどのかきねの内などの
うゑべし。大小二又あり。葉亜帚にそ
きわけ又おほくもえいでる。根のあらく本ぶとく
大く長さ尺ばかりにのびる。莖枝細くふ
げきにちかやうにてこれもまたおほくよりあつまりて生ず。
かどにくよりあるゆゑにこの名あり。
ゆべし。○切ものにしてよくもみ合せ
よりて。おのこ女にはしらくそしておきやもし。秋実のり
て紫あをくなりたるをよくほしてよく切べし。
比ゆくもぢ。秋にさくそねを入てさゝ。帚にするなり。

よい地膚のようなく葉よりも丸ゆるおなりぬをとりさ
除るもよう。九月のすゑおのづからうるまりぐもちくべし。九
月のおわりのおそきをおまけてとるものなりぬ時代
ぐさ〳〵

蒲公英 オキナ

たんぽゝ。秋苗を生じ。冬根ありて。春花さく。黄白の二種あ
り。花八菊に似てくぼひらくおのひらきあり。又ねを
とぢ。二月前ぐく苗うえて。

蒲公英

豬ーうゆるもよう。正月ぬをつゞけるとを前まするもよう。味の苦苣ぐ利ぬより用ゆる時茶をとりくはをさぴさーぬのへぬの汁ぬ入てよく煮ぢ。利ぬしてよく。乾を食をとりぐ大用乃秘結をよくをれ。塞ぬ塔ぐ久おのようとぢやすげる。乳と薬ど。年人の乳癰狂治を

苣蕒 オキナ

倭俗かうらい菊ともえ。千草よハ八九月よりぬをとまもちえ。冬ぢ去初冬ぢえ肥ぢく味辛く苦。

二月よく生ず。葉花あり。花は淡紅色。よし。其の性平にして無毒。

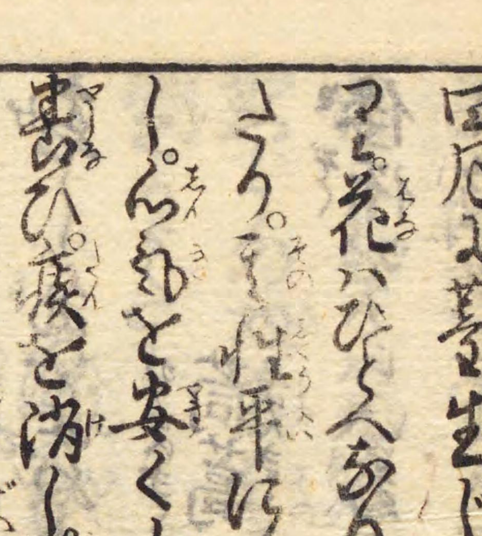
一名を安くし。脾胃を調ひ。腸胃の利を主る。痰を消し。腸胃の利を主る。

ととのう。若葉を採りて、二月の食とせんために、前の味よし。

て味よし。冬もとをほりて、ゆでて、

ろにさらす。

百合 才十九



萵苣

百合

葉ながら煮ておなり。本草と考ふるよ。花白きを用ゆとよろし。今世に実ゆり薄戸ゆりなど云ふあり。又一名笠百くして葉の下ふかきを生ず。六月の夏花を蒜くて花の上ふの赤麻をまぜ。つぼ巻丹なりとをとよく云ふ行をおして粉にし。よろ水を空。

くへおのうねに梅をそべし。二年ばかりたさて畝のかし。
年くに沢菜にして移べし。ようくわきこのあをそべしなん
草に。百合歌のうへにて食しに用ふ和してみよし。
乾きてうへ粉にして餅とせんに食を人に益あり
○ゆりの根をうへ用ろよし。ふかりかさねくしたのめ
と三ケ一もうおしてそれをおくへし一番へ沢のよ
らん又大うこおのでくくなるおりすまるおと告ねさず。
毎くかはよんをおをいこなぶんのうみ
と年く植置バいつ植もうまくなるおありこゆりね根
を湯うくゆひさ蒸よし又ひくうゆおにめ

おのこ芝料理おかし○百合ねをそぐ
て年ぐにうへて他りぐ小給そごくく。かきこれ料理ようく。そはもよ
くこに仕でよし。そのうへ暑月よくうる
つきものあり。民家かもの必うのべし。第一氏乃食を
助けく飢僅をすくふ又蒸ものあり。
あの紫いもの紫ねでくく
根の部つゆゆうこのごとし。
はくのゆうこのごとし
鶏頭花 才三年

把地よろし。くぼくでやわらかなるべし。大きさは
あり。蒔くあひだ
よく。花さくまぐち
のなるあり。その味も苣よ
ハ味きわめて性も似ものあり
つぼミをさしもの酢みそ。

獨活 才二十

三四月芽立を生にて味噌
漬おまねく賞味する物
つぼミをさしもの酢みそ。

冬より去中なる芽を
あらざるを食ふべからず
取てよく
多くゆでし。その地味よ
ほよ味よし。残りこの
さ而又汁ものの部かげ
の條ありて多く作りその中に物すべ

本草よめくむ乃根苗を
用よを採ぶとあり。
荷 才三十二

二三月よき生ぐ。

ろのかろかどにもそのづ
かくさくけるぶに美春とそのね
へねひくくねひよ男ひそよく。
東坡云昔せくねやそれ
元奇ろいはよろうのくく
味もよく

藜 オ二十三

本草に水対名のべく老て
その茎を杖とするべくと
そろ茹てよくひくくねひ

藜

齊

よう。狩そして多くそねあり。唐こくくいあうざの
実。食なるろ元生る。食とするるあり。日々こくくも
把ちよ生そるか大をふくそして又狩さゆ。老人の杖
にするものあり。皆下るかの茎ろるる。詩そと文こ
も仰りろ

胡荽 オ二十四

葷菜の治こころんとろ
そ元食おろう元奥と
よくちりのあり。狩肉熟
陽そこの料理こかのれんお

胡荽

しるし枝清しを宜し。痘瘡のわかものを
うく養ふさまのごくそを用ゆるなり。痘疹のはやりはじめ
のころ、かべ帳かどに吹くどれ魚きを救を不可くれべ。山実を酒に浸し一夜
防風 才三十五
これ茎葉の細にてうか
し。油漬乾すべる魚
よきもの。その葉あくうれ
染もちる。その細にて作るべ

るものなり。茎をうくうり
にひくくて苦し。その葉ともに
細比の苗よく作るべし。実をそ
つ。大色ホをさ和ふ多くく
よくすべし

蕃椒 才三十六

苗を植るの又地でら
への好も。苦かると同じ。
苗長してはのうれ。
その実赤さあり。ぴそ色を

るあり。茎ある方。天
大あり小あり。長き短き
さまざまおかし。食へども一なることを多くなる
物あり。魚ところどころ粗悪をたとく。人家おおさ大
邑ところ辺ところ不少多くつくりて売べし。牡つくり
ものなり。つくる食ことを消じ。気抜滞となじ。
脾胃をくろげ。魚肉などのあしきものをけをおる
ことを性有草ところはるし。世俗八歳時弥ゲ高知なる者ところ。
又乞とくろやきうし。ぬるそおりく飛ばれば。年久しき下血を治するなどもちるし。